Ⅰ　研究主題

生きる力をはぐくむ授業の展開

～自己学習力を育てる指導の工夫～

Ⅱ　主題設定の理由

平成２０年３月の学習指導要領の改訂を受け、平成２３・２４年度の完全実施へ向けて昨年度から移行措置期間が始まった。今回の改訂の重点は、生きる力を育成するために基礎的・基本的な知識・技能の習得とともに、それらを活用し、思考力・判断力・表現力等の確かな学力をはぐくむことである。また、２１世紀は「知識基盤社会」とも言われ、その社会の実現という観点からも同様の力が求められている。そして、変化する社会の中でこれらの知識・技能・能力を常に使えるようにしておくことが求められている。

つまり、生きる力を育成するためには、変化する社会に対応するために生涯にわたって自ら学び続ける能力や意欲が必要である。

そこで、本研究所では、「既有の学習経験や生活体験からの興味・関心・意欲を基に、自ら課題を見い出し、自分なりの見通しをもち、自ら思考・判断したり表現したりしながら解決し、その結果をまとめ振り返るとともに、自己の学習を分析・修正する一連の活動」を自己学習サイクルとし、それを構築し推し進めていく力を自己学習力と定義することにした。そして、昨年度までの本研究所の研究の成果や課題等からも、生きる力をはぐくむためには、この自己学習力を育成することが必要であると考えた。

これらのことから、授業の中で自己学習サイクルを構築したり、推進したりする手立てを工夫すれば、自己学習力が育ち、そのことによって生きる力をはぐくむことができると考え、本主題を設定した。

Ⅲ　研究の仮説

仮説１

授業において、協同的な学習を取り入れたり、自己の学習を分析させたりすることで個の学習の質を高めれば、児童生徒は集団の中で学ぶ楽しさを味わいながら自発的に学習に取り組むようになり、自己学習サイクルを構築することができるであろう。

仮説２

授業において、教師の言葉かけやお互いに認められたうれしさを感じさせる相互評価の方法を工夫することで学習への意欲を高めれば、児童生徒は学ぶ嬉しさを味わいながら自主的に学習を進めるようになり、自己学習サイクルを推進することができるであろう。

Ⅳ　研究の内容

１　仮説１についての内容（自己学習サイクルの構築）

(1) 個の学習の質を高める協同的な学習の進め方

(2) 自己の学習の道筋を点検・修正する学習分析の仕方

２　仮説２についての内容（自己学習サイクルの推進）

(1) やる気にさせる教師の言葉かけの仕方

(2) お互いに認められた嬉しさを感じさせる相互評価の在り方

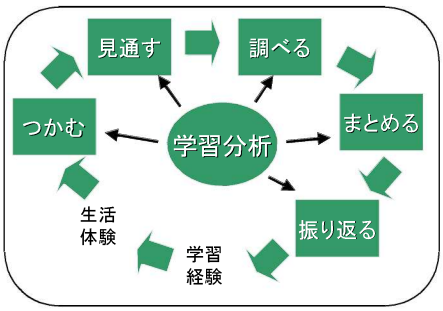
Ⅴ　研究の構想

都城市の教育目標
たくましいからだ　豊かな心　すぐれた知性

研究主題
生きる力をはぐくむ授業の展開
～自己学習力を育てる指導の工夫～

自己学習力の育成

【自己学習サイクル】



構　築

【仮説１】
授業において、協同的な学習を取り入れたり、自己の学習を分析させたりすることで個の学習の質を高めれば、児童生徒は集団の中で学ぶ楽しさを味わいながら自発的に学習に取り組むようになり、自己学習サイクルを構築することができるであろう。

推　進

【仮説２】
授業において、教師の言葉かけやお互いに認められたうれしさを感じさせる相互評価の方法を工夫することで学習への意欲を高めれば、児童生徒は学ぶ嬉しさを味わいながら自主的に学習を進めるようになり、自己学習サイクルを推進することができるであろう。

自発性

学ぶ楽しさ

学習の質の高まり

【研究内容１】
○　個の学習の質を高める協同的な学習の進め方

○　自己の学習の道筋を点検・修正する学習分析の仕方

学び合い

自主性

学ぶ嬉しさ

学習への意欲の高まり

【研究内容２】
○　やる気にさせる教師の言葉かけの仕方

○　お互いに認められた嬉しさを感じさせる相互評価の在り方

認め合い

Ⅵ　研究組織

所長 ― 次長 ― 主事・庶務 ― 研究部 / 編集部 / 研修部 ― 全体研究会

Ⅶ　研究の実際

１　研究の基本的な考え方

(1) 生きる力について

生きる力とは、変化の激しいこれからの社会を生きる子どもたちに身に付けさせたい「確かな学力」、「豊かな人間性」、「たくましく生きるための健康や体力」の３つの要素からなる力

本研究においては、「生きる力」をはぐくむために必要な知識や技能はもちろんのこと、これに加えて、学ぶ意欲や自分で課題を見付け、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題解決する資質や能力等までを含めた「生きる力」の知の側面に着目して研究を進めることにした。

(2) 自己学習力について

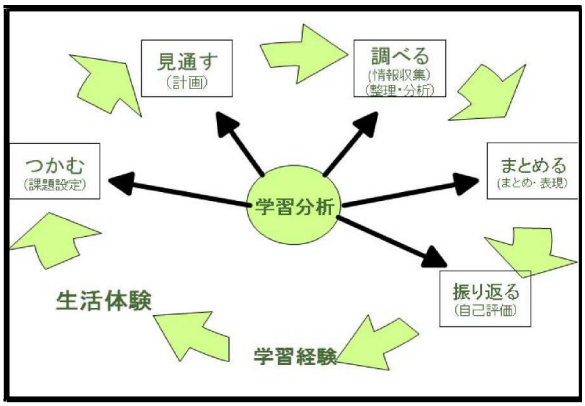
自己学習力とは、自己学習サイクルを自ら構築し、推進していく力

自己学習力を育成するためには、学び合いを通して学習の質を高め、学ぶ楽しさを味わわせたり、認め合いを通して学習への意欲を高め、学ぶ嬉しさを味わわせたりすることが重要である。学ぶ楽しさが自発性を伸ばし、自己学習サイクルの構築につながり、また、学ぶ嬉しさが自主性を伸ばし、自己学習サイクルの推進につながる。

(3) 自己学習サイクルについて

自己学習サイクルとは、既有の学習経験や生活体験からの興味・関心・意欲を基に、自ら課題を見い出し、自分なりの見通しをもち、自ら思考・判断したり表現したりしながら解決し、その結果をまとめ振り返るとともに、自己の学習を分析・修正する一連の活動

「つかむ」、「見通す」、「調べる」、「まとめる」、「振り返る」といった問題解決的な学習は、この自己学習サイクルの中に含まれる。



【図１　自己学習サイクル】

２　自己学習サイクルを構築する手立て

(1) 個の学習の質を高める協同的な学習の進め方

ア　協同的な学習について

協同的な学習とは、集団における学習者が、共通の目標や目的をもち、それぞれの考えを基に、お互いの考えを交流させながら、新しい考えを主体的に構成し、課題を解決したり、目標を達成したりしようとする学習活動

協同的な学習の流れでは、個人思考→集団思考→個人思考の過程を原則としている。

イ　協同的な学習を成立させる要素とその内容

上記の協同的な学習の定義を満たす要素には「目標や目的の共有」、「個人の考え」、「考えの交流」、「考えの再構成」がある。授業の各場面に位置付けられた４つの要素が満たされることによって、はじめて協同的な学習が成立する。集団活動という意味でグループ活動に包括されるが、４つの要素から、目的や個人の立場がより明確であり、単なるグループ活動とは異なる。

協同的な学習を構成する要素	各要素の説明
目標や目的の共有	全員が共通の目標や目的をもつことで、問題解決に向けた意識やゴールイメージが統一され、協力体制が確立される。
個人の考え	各個人が課題に対しての考えをもつことにより、集団としての話合いが活性化され、考えが深まっていく。また、個人が考えをもつということは、集団の中で役割をもち、何らかの形で集団に貢献できるということであり、そのためにも、協同的な学習は全員参加を原則とする。
考えの交流	様々な考えや意見を交流させることによって、知識や方法、経験、ものの見方を共有し合い、そこから多くのことを学ぶことができる。また、他者と自分の考えを交流させることで、新たな気付きや発見が生まれ、学び合いも深まっていく。 他者と自分の考えを交流させるとは、関連付けたり、比較・分類したりすることである。考えが思い付かない、解決方法が分からない場合でも、そのことを伝えながら周りと考えの交流をもつことで、新たな学びへと結びつけることができる。
考えの再構築	協同的な学習のねらいは個の学習の質を高めることである。そのために、個人が、考えや知識、方法などを、協同的な学習を通して再構成することが重要である。 集団思考での学びをもとに、個人が再度自分なりに考えや知識、方法などを再構成していく。その繰り返しを通して、個の学習の質が高まり、自己学習力の育成へとつながっていく。

学習の質の高まり

【協同的な学習の４つの要素とその内容】

ウ　検証授業の結果と考察

（小学校第４学年社会科）

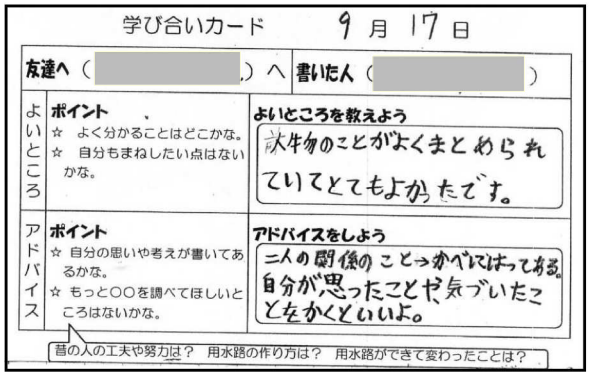
段階	時数	協同的な学習	主な学習活動と内容
つかむ	1	目的や目標の共有	○　前田用水路と水田の写真から、気付いたことや疑問・感想を話し合い、学習課題をつくる。 今も使われている前田用水路の開発は、どのように進められ、どんな努力や工夫があったのでしょうか。 ○　興味・関心に基づき、自分の調べていきたい学習内容について考える。
見通す	1		○　個人の学習課題を決め、活動の見通しをもつ。 ・　個人の学習課題 ・　調べる計画（日程、方法など）
調べる	3	個人の考え	○　個人を中心に調べ活動を行う。 A　坂元源兵衛について B　前田正名について C　坂元・前田両者の関係について D　用水路の作り方について E　前田用水路の場所や作った理由

	4	考えの交流	○　調べたことを伝え合い、互いに意見交流をしながら、前田用水路をつくった人々の工夫や努力について考える。　（本時） 活動の内容 ／ 時数 ・　個人の発表→意見交流→次時の活動の確認 ／ 1 ・　調べ活動 ／ 1 ・　**個人の発表→意見交流→次時の活動の確認** ／ **1（本時 ）** ・　調べ活動 ／ 1
まとめる	2	考えの再構成	○　調べたことを発表し合う。 ・　ポスターセッション型の発表
振り返る	1		○　学習課題について、自分なりに感じたことや考えたことを書き、先人の努力や工夫をまとめる。

（本時の手立て）

要　素	手　立　て
①　目標や目的の共有	○　よりよいまとめ新聞にしていくために、意見を交流し、アドバイスすることを確認する。
②　個人の考え	○　自分の考えがまとまるように、一番伝えたいことに線を引かせる。 ○　発表するポイントが整理できるように、伝えるべき項目の視点を与えておく。
③　考えの交流	○　良い点やアドバイスを伝え合う際に、学習のねらいに沿った意見交流ができるよう、評価の視点を伝えておく。
④　考えの再構成	○　アドバイスをもとに再度詳しく調べる際、児童のニーズに対応できるよう、本、写真、動画など、多様な資料を用意しておく。

意見交流の観点を示すとともに、教師が望ましいアドバイスを全体に向けて発信することで、より質の高い話合いができ、友達からのアドバイスを生かして資料に手を加える姿が見られた。課題として、教師が全グループを確認することが難しく、個々の質の高まりをどう評価していくのかを検討する必要があることが分かった。


学び合いカード　9月17日

友達へ（　　）へ　書いた人（　　）

よいところ　ポイント
☆ よく分かることはどこかな。
☆ 自分もまねしたい点はないかな。

よいところを教えよう
水生物のことがよくまとめられていてとてもよかったです。

アドバイス　ポイント
☆ 自分の思いや考えが書いてあるかな。
☆ もっと○○を調べてほしいところはないかな。

アドバイスをしよう
二人の関係のことっかべてはってある。自分が思ったことや気づいたことをかくといいよ。

昔の人の工夫や努力は？　用水路の作り方は？　用水路ができて変わったことは？

【授業で活用した学び合いカード】

【授業の様子】

(2) 自己の学習の道筋を点検・修正する学習分析の仕方

ア　学習分析について

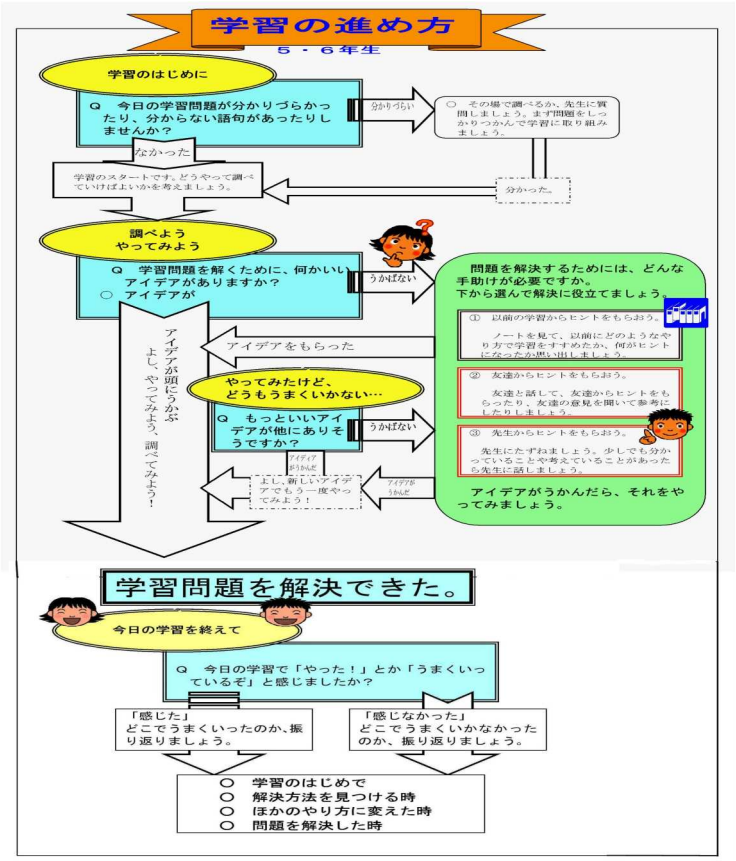
> 学習分析とは、問題解決的な学習の中で、目的（なぜその課題を追求してきたのか）や内容（何を明らかにしようとしているのか)、それらの方法（どのようなやり方で追求すべきなのか）などが、適切な状態であるかどうかを自らに問いかけて分析し、常に適切な状態に修正すること

児童生徒が学習分析を行いながら学習を進めていくためには、まず学習の局面毎に自分に問いかけ、自分の考えや学習の進み具合を把握することが大切である。次に、自分の課題に対して解決の仕方を考え、実行していくことも大切である。これによって課題が明確になり、児童生徒が学ぶ楽しさを味わいながら自発的に学習に取り組むようになり、自己学習サイクルを構築することができると考える。

イ　学習の進め方の提示

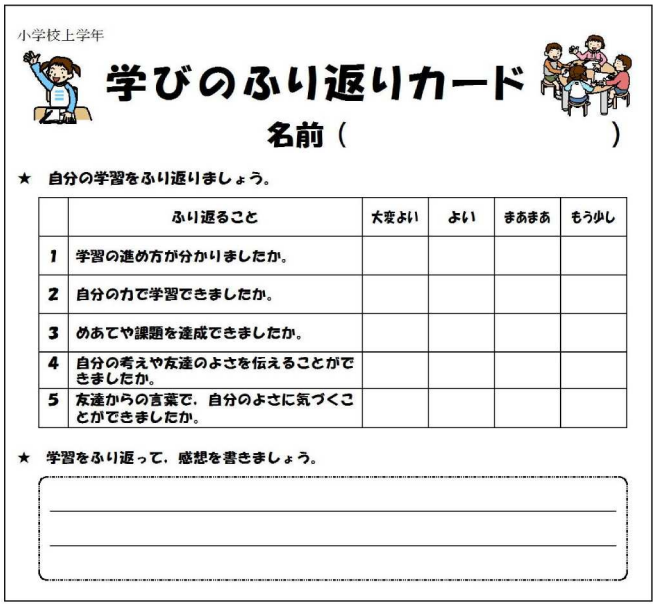
自分への問いかけと課題解決のヒントをまとめて「学習の進め方」を作成した。これを学級の前面に掲示し、授業中に児童生徒が見ることができるようにした。これにより、児童生徒一人一人が自分の学習している段階に応じた学習分析を行い、自主的な問題解決の手立てとなった。

また、「学習の進め方」は、学習の途中で自分は何が分かっているのか、分かっていないのかを自己に問いかける手助けとなるよう、一斉に活用したり、個別に活用を促したりした。



【図２　学習の進め方　高学年用】

さらに、自己学習サイクルの中で、学習の目的や内容、方法などが適切な状態であるかどうかをメタ認知的に振り返り、適切な状態に修正するために、「意欲」、「内容」、「学び方」、「関わり」などを４段階で評価する自己評価カードを活用した。



小学校上学年

学びのふり返りカード

名前（　　）

★　自分の学習をふり返りましょう。

	ふり返ること	大変よい	よい	まあまあ	もう少し
1	学習の進め方が分かりましたか。				
2	自分の力で学習できましたか。				
3	めあてや課題を達成できましたか。				
4	自分の考えや友達のよさを伝えることができましたか。				
5	友達からの言葉で，自分のよさに気づくことができましたか。				

★　学習をふり返って，感想を書きましょう。

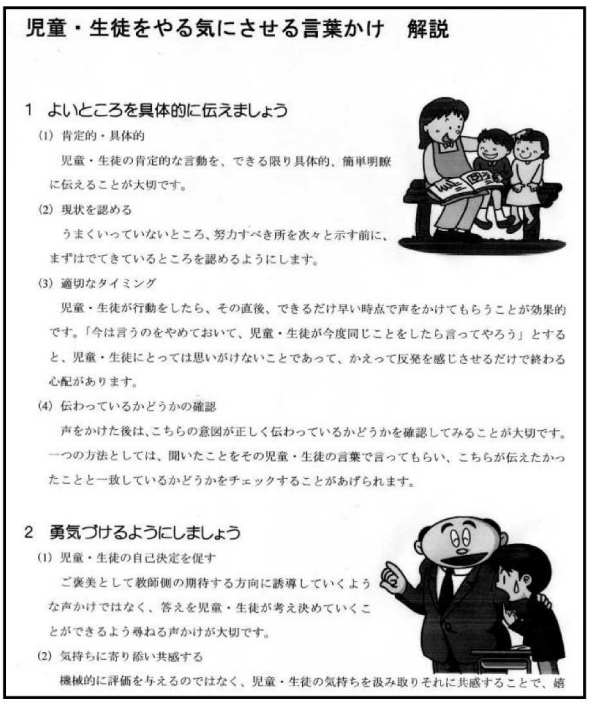
【図３　学びのふり返りカード　上学年用】

３　自己学習サイクルを推進する手立て

(1) やる気にさせる教師の言葉かけの仕方

児童生徒の意欲を高めるためには、教師の言葉かけを工夫する必要があると考えた。そこで、言葉かけのポイントを検討し具体例を整理した。

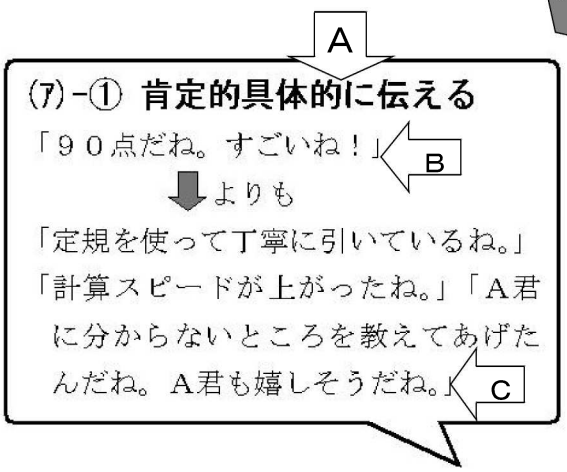
ア　教師の言葉かけのポイントについて



【図４　教師の言葉かけリーフレット】

イ　言葉かけの具体例

具体例については、前記した３つのポイントにあわせて、具体的に示した。



【図５　教師の言葉かけリーフレット】

上の図のように、

Ａ：ポイントの内容を示す。

Ｂ：普段、児童生徒にかけてしまいがちな言葉を例としてあげる。

Ｃ：よりよい表現・言葉かけを示す。

というように示すことで、教師が自分自身の言葉かけを振り返ることができるようにした。

(2) お互いに認められた嬉しさを感じさせる相互評価の在り方

ア　基本的な考え方

お互いに認められた嬉しさを感じるとは

「自分の学習活動を認めてもらえる。」
「自分の学習活動が生かされる。」
「できなかったことも含め共感してもらえる。」
「互いのがんばりに共感する。」

評価の目的

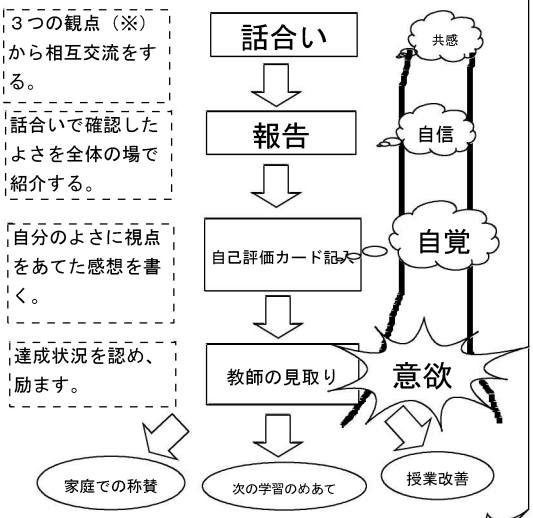
〇　互いの達成状況を肯定的にたたえ合い、さらなる一歩上位の取組に向けての相互要求、相互援助の形を取りながら評価すること
〇　児童生徒の自己有用感を高め、メタ認知能力をはぐくむこと

イ　評価の方法と評価の流れ

評価の方法としては「話合い法」、「カード記入法」を用いて実施する。

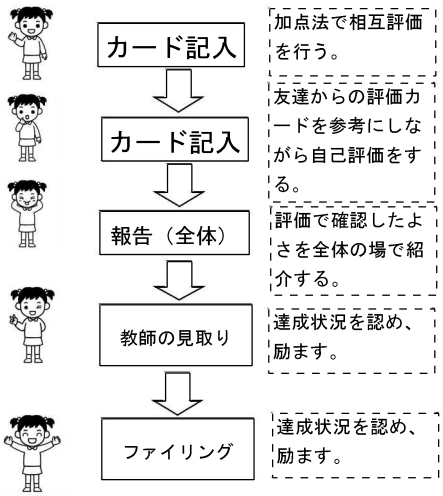
話合い法

〇　一単位時間の中に位置付ける。
〇　学習内容・活動や児童生徒の学習状況に応じて設定する。



カード記入法

〇　主に単元の終末に位置付ける。
〇　学習内容・活動や児童生徒の学習状況に応じて設定する。



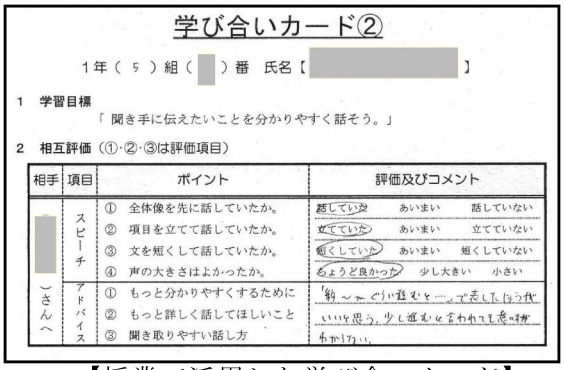
※　３つの観点：「①よい点を見つけ、何故よいか発言する。」、「②間違いや足りない点を見つけ、どうしたらよくなるか提案する。」、③「友達のよさを自分の考えに生かす。」

ウ　検証授業の結果と考察

（中学校第１学年国語科）

段階	協同的な学習	学習内容及び学習活動	指導上の留意点	評価	資料・準備
つかむ 7分	目標や目的の共有化	1　「霜月の音読名文集」を読む。「語り」を聞く。 2　前時の復習をする。 3　本時の学習のめあてを確認する。 今まで学習した三つのポイントをおさえて、相手に分かりやすく伝えよう。	○　リズムよく大きな声で読ませる。 ○　本時の学習内容（スピーチ）を意識させる。 ○　「全体像を先に話すこと」のポイントについて確認させる。 ○　今日の学習内容を理解させ、本時の学習への意欲付けを行う。 ○　三つのポイントをしっかり確認させる。 ・　文を短くして話す ・　項目を立てて話す ・　全体像を先に話す		音読集 ＴＶ 模造紙
見通す 3分 調べる 20分 まとめる 15分	個人の考え 考えの交流 考えの再構成	4　学習の進め方について確認する。 5　スピーチ原稿を確認し、スピーチ練習を行う。（３分） 6　グループごとにスピーチと意見交流を行う。（17分） ・　評価項目の確認 ・　スピーチの実施と相互評価 ・　スピーチの改善点の話合い 7　アドバイスをもとに、スピーチ原稿を練り直し、スピーチを行う。（12分） ・　スピーチ原稿の推敲 ・　スピーチ練習 ・　ペアでのスピーチ 8　分かりやすく話すためのポイントを確認する。（３分）	○　今日の学習の進め方をしっかりと理解させる。 ○　スピーチ練習の際は、原稿用紙を見ないように行わせる。 ○　班員だけに聞こえる声で、恥ずかしがらずにスピーチするように促す。 ○　指摘された改善点に対して、自ら班員の意見を求めるように促す。 ○　班員から聞いた意見については、メモを取らせる。 ○　改善点を具体的に示した場合は、称賛し、他の班への参考にする。 ○　意見交流で出たメモを基に、スピーチ原稿を推敲させる。 ○　隣の生徒の方を向いて、しっかりスピーチを行わせる。 ○　スピーチに対して称賛の拍手を行わせる。 ○　三つのポイントを意識しながら、話すことの大切さを理解させる。	① ②	原稿用紙 相互評価カード 原稿用紙
振り返る 5分		9　自己評価を行う。	○　本時の授業を通しての自己評価を行わせる。		自己評価表

相互評価により、生徒がこれまでよりもお互いの意見をしっかり聞き、積極的に活動するようになった。また、班員からのよい評価を聞き、認められた嬉しさを感じていた。さらに、班員からの意見を参考にすることで、各自の考えに深まりが見られた。多くの生徒にとって、最初のスピーチよりも２回目のスピーチが向上する指導となった。



学び合いカード②

１年（５）組（　）番　氏名【　　】

1　学習目標

「聞き手に伝えたいことを分かりやすく話そう。」

2　相互評価（①･②･③は評価項目）

相手	項目		ポイント	評価及びコメント		
○さんへ	スピーチ	①	全体像を先に話していたか。	話していた	あいまい	話していない
		②	項目を立てて話していたか。	立てていた	あいまい	立てていない
		③	文を短くして話していたか。	短くしていた	あいまい	短くしていない
		④	声の大きさはよかったか。	ちょうど良かった	少し大きい	小さい
	アドバイス	①	もっと分かりやすくするために	「約～～ぐらい話むと…」で表したほうがいいと思う。少し短くと言われても意味がわかりづらい。		
		②	もっと詳しく話してほしいこと			
		③	聞き取りやすい話し方			

【授業で活用した学び合いカード】

Ⅷ　研究の成果と課題

１　研究の成果

(1) 仮説１について

○　協同的な学習を行うことにより、児童・生徒の学び方や考え方に変容が見られた。特に、「考えの交流」の場面において、新たな気付きや発見があり、学ぶ楽しさを味わうとともに、新たな学びへと結び付けることができた。

○　学びの振り返りカードを使用することにより、自分の学習を振り返り、次の学習への意欲が高まった児童・生徒が多く見受けられた。

(2) 仮説２について

○　よいところを具体的に認めたり褒めたりすることにより、児童・生徒は学ぶ嬉しさを感じ、さらに学習したいという意欲を高めることができた。また、教師の言葉かけが、言葉かけをした対象以外の児童・生徒にもよい影響を与え、学習集団としての質の高まりが見られた。

○　相互評価を取り入れることにより、他者から認められたことが、児童・生徒の意欲的な学習への取組へとつながった。特に、よいところやアドバイスを紹介し合うことで、主体的に学習に取り組み、個人の考えを深めたり高めたりすることができた。

２　今後の課題

(1) 仮説１について

○　学習の質の高まりという視点から、協同的な学習や学習分析の仕方をより効果的に進める方法をさらに研究する必要がある。

(2) 仮説２について

○　児童・生徒の評価する力を高めるために、相互評価の継続的な取組や、評価の観点を意識させる工夫をさらに研究していく必要がある。

《参考文献》

○「小学校学習指導要領」　文部科学省

○「中学校学習指導要領」　文部科学省

○「学校の挑戦　－学びの共同体を創る」　佐藤　学　小学館

○「学習の輪　－アメリカの協同学習入門」　デイヴィット・W・ジョンソン　イデッス・ジョンソン・ホルベック　ロジャー・T・ジョンソン　二瓶館

○「学級再生のコツ」　諸富　祥彦　学研

《研究同人》

都城市教育研究所所長	野　村　勝　由	都城市立志和池小学校	萱　嶋　秀　雄
都城市教育研究所次長	有　嶋　　誠	都城市立祝吉小学校	坂　元　祐　征
都城市教育研究所主事	南中道　　隆	都城市立高城小学校	西　　慎　吾
都城市教育研究所主事	後　藤　世志哉	都城市立明道小学校	高　山　淳　子
都城市教育研究所主事	日　髙　　亘	都城市立縄瀬小学校	松　浦　悟　史
都城市教育研究所主事	二　宮　正　志	都城市立沖水小学校	原　田　俊　彦
都城市教育研究所主事	近　藤　公　博	都城市立沖水小学校	日　高　　茂
都城市教育研究所庶務	小岩屋　美　香	都城市立小松原中学校	中　島　美　智
都城市立祝吉中学校	枇　杷　善　彦	都城市立高城中学校	楯　岡　秀　人